

里山との共生が、 人を豊かにし 環境保全の心を育む

河辺いきもの森ネイチャーセンター 丸橋 裕一 さん

河川に沿って分布する河辺林と呼ばれる森林は、かつて里山として大きな役割を果たしていました。北海道をのぞく全国の河辺林の二割が滋賀県にあるといわれ、滋賀県らしい自然環境ともいえる河辺林。その保全に取り組む八日市市では、薄れていた自然と人との関係を再生することで市民意識が向上し、保全活動に活力が生まれています。

失われゆく平地林を守れ

琵琶湖の東岸に位置する八日市市では、一九九八年から市内最大規模の平地林の保全活動を開始しました。琵琶湖に注ぐ一級河川のひとつである愛知川の河辺林一帯には、愛知川の氾濫をくい止める水害防備林、そして薪や柴を供給する

農林用という二つの大きな役割がありました。しかしながら大きな堤防がつくれ、ガスや電気が普及すると、洪水の頻度も低下し、薪や柴、落ち葉を燃料や肥料として使う必要がなくなると、人との結びつきも薄れてゆきました。そのため工場用地や砂利採取場としての開発が加速度的に進みました。



そんな中、かるうじて残ったのが建部の北町の約一五ヘクタールの平地林。開発

の対象になりやすい平地に、これほど大規模な森が残っているのは珍しく、伏流水や氾濫原だったせいか、低海拔地でありながら山地の動植物が生息することが研究者にも注目されている地域でした。このまま放置すれば、いずれ森が消失してしまう恐れもあることから、残された平地林を守ろうと八日市市では複数の森林所有者らと二十年間の借地契約を結び、保全・整備することとなりました。

しかし自然にできた山と違って、里山は周期的な伐採など人の手を適度に入れることで、バランスのとれた生態系が保たれています。手入れを怠れば、そのバランスは失われ、背の高い樹木は伸び放題、その下を背の低い常緑樹が覆い、鬱蒼として

下草が生える余地がない地帯。かつて生活のために家のそばにあった竹が、無秩序に繁茂して植生の単純化が起きている地帯。市が借地契約した当時の愛知川の河辺林は、現在の美しい姿からは想像もできないほど荒れ、とてもそのまま放置できない状態でした。

このため、森の整備事業に先行して、市の呼びかけでボランティア団体「遊林会」をつくり、自分たちができることからやっというところという考え方のもと、一九九八年から河辺林の保全作業を始め



ネイチャーセンター

した。

二〇〇二年三月からは一帯を「河辺いきもの森」として市民に開放。自然観察や体験学習を行う拠点として、山小屋風のネイチャーセンターや炭焼き小屋、野鳥観察小屋を備えました。買い上げでなく借地の形態をとったこと、市内の自然保護・公園管理全般を担当する「花と緑の推進室」が、市役所から敷地内のネイチャーセンターに移動して所管したことで、そして何よりも、事業に先立ってボランティア団体が保全活動を始めており、事業終了後も森の保全や運営にかわり続けているということが、この事業の特徴です。

「木を伐って森を守る」 保全ボランティア活動が 生きがいに

「遊林会」が立ち上げられたのは、折しも全国で里山への関心が高まり、森林ボランティア活動が盛んになり始めた時期。初回は五名とわずかな参加ながら、市民の講座での呼びかけが効を奏し、二回目には二十名が参加しました。その中心はかつて山や森で遊んだ経験のあるリタイア世代。その後は会員が友人を連れにくるなどして口コミで広がり、現在は子どもから高齢者まで約五十名が、茂りすぎた樹木の伐採や落ち葉かき、炭焼きなどさまざまな作業に携わっています。「遊林会」の活動が活気にあふれてい



「遊林会」主催の自然観察会

るのには、いくつかの理由があります。まず、発足時に自治会などに参加を打診して人数を集める「お願ひ型」の呼びかけを一切行わなかったことが挙げられます。この先二十年、三十年と森を守り続けるためには、「お願ひ型」で人員を確保していたのでは継続に無理が生じるとの判断からでした。その結果、初回こそ集まりが悪かったものの、二回目以降は予想以上の反応がありました。それは、ボランティアのやり方に工夫をしているためです。「河辺いきもの森」をふらっと訪れた人が気軽に参加できるよう、作業メニューは毎回その日に配っています。一回のメニューは五つないし六つで、チェーンソーで木を伐ると

いうハードなものもあれば、誰にでもできる落ち葉かきやセイタカアワダチソウを抜く仕事、また炭焼きなどの経験を必要とする仕事、さらには食事係まで幅広い作業が用意されています。参加者は、その中から好みに応じて自分のやりたいこと、自分にできそうなことを選んでいきます。やり手がない不人気の作業があってもおかしくないのですが、毎回どの作業も必ず希望する人が現れます。食事専門に毎回訪れる人もいます。先にも帰っても、遅れて来てもよい決まりです。こうした自由度の高さが、逆に会員定着率を上げているのです。

これらの活動スタイルに加えて、成功の要因として大きかったのが、都会に住む人たちにとって、草刈りや木の伐採が、レクリエーションになってきているという事実。田園地帯の残る八日市市で、伐採や草刈りなどをどの程度レクリエーションと捉える人がいるか懸念されましたが、自然とふれあう楽しさは人々を魅了し、わざわざ遠方から時間をかけてやってくる人もいるほどです。木を伐ること自体がおもしろく、さらに余分な木を伐採して明るくなった森に翌年になって花が咲き始め、カフトムシがくるなど変化が目に見えてわかるので、やりがいを感じるのです。

やがて、毎月第2土曜日だけでなく、第4水曜日も活動日とすることになりました。「平日にもやらせてほしい」という要望が高齢者の会員から出たため

す。水曜日には、参加者が一緒に歩きながらその日の状態を見て、「セイタカアワダチソウが伸びて花がついてきたから抜かないといけない」「じゃあ私がやりましょう」「そろそろ炭を焼こう」と自分たちで作業内容を決めていきます。炭窯は、炭焼きを一から学んだボランティアが作り上げたものです。

ボランティアの継続的な参加を期待する以上、作業を楽しもうとするスタイルを生み出すことが重要になります。「自然を守る」という使命感だけでは、やがて負担になり、長期継続が難しくなることも予想されるからです。「遊林会」の名の通り、森で遊び、楽しさを味わいながら自分たちで考え、自主的に行動する会員が増え、高齢者の生きがいの創出にもつながっていることは、里山保全ボ



「遊林会」スタッフによる森の利用ガイド

ランティアの活動が生んだ大きな成果といえるでしょう。

人と自然とのかかわりを学ぶ環境学習の場を提供

「河辺いきものの森」には、現在、キツネやアナグマ、ノウサギなど多くの動物が生息しています。シジウカラヤヒヨドリ、コゲラなどの鳥もいます。植物は外部からの持ち込みをせず、コナラやクヌギなどももと地域にあった植物を基本に、拠点施設であるネイチャーセンターの周辺にのみ昔の農家の庭先によく植えられていたグミやナツメを植えています。地下水を利用した水辺ピオトープには、整備後すぐにトンボが産卵してく

るなど、水辺の昆虫があつという間に増えていきましたが、なによりも喜んだのは、ジャバジャバと入って遊ぶことができる川がなくなってきた現代の子どもたちで、夏にはびしょびしょになって森の中の川で遊ぶ姿が見られるようになりました。



水辺の観察

環境学習の必要性が叫ばれながら、実際に体験させる場が限られる現在、「河辺いきものの森」は、体験学習の場として大きな役割を担っています。市街地の近くにありながら、自然と親しめるとあって利用者は予想以上。来園者が実際に森に入って自然に親しめるようクイズラリーなどのプログラムが多く用意されます。平地とあって車椅子を使つての散策も多く、視覚障害のある人を対象にした自然観察会が企画されるなど福祉面にも積極的に取り組んでいます。

一方、森である以上、マムシやスズメバチもいれば、うるしの木もあります。時には子どもたちに害を及ぼすこれらの動植物だけを森から排除するのは不可能なので、訪れた際に注意を喚起するようにしています。昔は子どもでも何が危険かを知り、危険に遭遇した時の対処法を体得していました。今の子は身近に里山がなくなり、自然界に存在する危険なも

のをそれと認識できなくなっています。かつて身につけていた知恵を再び取り戻し、未来に継承するために、危険を回避する力を学習させる機会が必要です。のこぎりやマツチを使ったことのない子どもが多く、時には工作中にケガをする子どもいますが、あえてプログラムから外すことはしていません。初めてののこぎりを持つて自分で伐つた木を、子どもたちはとても大事にして持ち帰ります。やはり「楽しさ」に結びついた体験は、子どもたちの学ぶ心を育みます。子どもたちが効果的な学習を受けられるよう、教師を対象とした講座も行っています。

職員たちの努力のかいあって、体験学習の成果が少しずつ現れています。この森で体験作業をした学校の生徒たちが、理科の授業で「裏山を調査したい」と言い出したそうです。体験学習でいろいろ木を伐つたりしたのがおもしろかったので、自分たちの住む町を調査したい、身

近な裏山のことももっと知りたいというのです。

ポランティアや体験学習の受け入れの最終的なねらいは、こうした地元への還元。「花と緑の推進室」では市内全般の自然保護・管理を行っており、「湖国ぐるり里山フォーラム」の開催や、県内の活動団体との情報交換、ネットワークづくりに積極的に取り組んでいます。「河辺いきものの森」にとどまらず、身近な自然に目を向け、保全のために行動する原動力となるのは、そこに住む市民。そのためのさまざまな情報やノウハウを蓄積し、発信していくことが、今後の課題です。

一方八日市市では、これからのエネルギーを化石燃料から転換していこうという新エネルギービジョンに取り組んでいるところ。「河辺いきものの森」を拠点に、森から伐り出された木材をエネルギーとして利用するための試みも進めています。

森には無限の可能性が秘められています。心のやすらぎ、未知のものに対する好奇心、何かを発見した時の喜び、自ら作り上げた達成感…。自然とかがわりながら生きる楽しさを体験したら、そこから新たなものを産出し自然環境に還元することも夢ではありません。ポランティアの活用にも成功したノウハウを生かし、新たな保全スタイルを構築して全国の環境保全事業をリードする存在となることを目指しています。



教師のためのセミナー風景